

中国文学研究会にとっての「翻訳」

熊 文 莉

中国語研究室

“Translation” to Chinese Literature Association

Wenli XIONG

Department of Chinese, Asahi University

1

中国文学研究会は1934年の初めごろ、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫ら東京帝国大学支那哲学支那文学科の卒業生を中心に結成された小さなグループである。ところが、この研究会は戦前の日本で始めて「中国」という言葉を会名とする組織でもあり、当時、明確に中国現代文学を研究対象とすると公言した唯一の研究会でもある。従って、日本の中国現代文学研究を論ずるとき、中国文学研究会は避けては通れない存在である。

1934年3月の成立から43年10月の自主解散にかけて10年間近く続けた中国文学研究会の活動を調べてみれば、翻訳は始終その中心活動の一つだということがわかる。しかも、中国文学研究会は作品の翻訳という実際的な作業に止まらず、言語という枠組みを超えた翻訳論を展開し、さらに、翻訳と外国文学研究の関係という根の深い問題を積極的に取り扱った。本稿では中国文学研究会の翻訳実践と会の機関誌でもある『中国文学』¹⁾に焦点を当て、会名でもあり誌名でもある「中国文学」に関わっている翻訳問題と『中国文学』の「翻訳時評」欄を分析しながら、中国文学研究会にとっての「翻訳」という問題について考察したい。

2

中国文学研究会の準備は1934年3月ごろから既に始まったが、公式に「中国文学研究会」を

1) 1939年前出版の雑誌は『中国文学(月報)』という誌名で、その以後は『中国文学』に改版した。この点に関する説明は本文4を参照されたい。

名乗ったのは同年8月4日に、東京の山水楼で行われた北京大学の日本文学を開講するために、日本に赴いた周作人と徐祖正両氏（共に北京大学教授、日本文学研究者）の歓迎会である。その翌年、中国文学研究会は機関誌——『中国文学（月報）』を出した。

『中国文学（月報）』は表紙がなく、菊版で12頁立てのものである。雑誌名の「中国文学」は武田泰淳が当時日本亡命中の郭沫若に頼んで書いてもらったものである。研究会名でもあり、機関誌の誌名でもあるこの「中国文学」という名詞自体に複雑な翻訳問題が含まれている。「中国文学」という会名について、1935年3月5日付けの『中国文学（月報）』第一号の後記にはこのような説明がある。

この会に対してまだ誤解があるやうだ。会名の「中国文学」は「支那文学」と同義である。固有な名詞が同文の二国間で翻訳なしに通用しない不便は避けたいと思ふ以外に他意はない。普通名詞としては「支那文学」と言つて一向差支へない。従つて我々の研究は現代文学のみならず古典にも渉るし、出来得べくんば文学だけでなく文化一般にも亘りたいと思ふ。

後記は竹内好が執筆したものである。「固有な名詞が同文の二国間で翻訳なしに通用しない」という話が意外に中国語と日本語という二つの異なる言語間の翻訳という問題の複雑さかつ深刻さを浮き彫りにしている。長い間、中日両国は同文同種の国だといわれてきたが、上述の説明は明らかに、この同文同種の考えを否定している。しかも、両国の言語間の翻訳の必要性を提示している。竹内は後記でただ「中国文学」か「支那文学」かを翻訳の問題に帰し、中国文学という言い方はあくまでも学術的な意味しか持っておらず、イデオロギーと関係がないということ強調しているが、実際には「中国」か「支那」かそれほど簡単なものではない。1930年代の中国人にとって、「中国」を使うか「支那」を使うかは一大事である。「支那」という呼び方は古くから日本人が中国を指して言う言葉である。中国文学研究会の同人でもある実藤けいしゅうは『中国人日本留学史』で「支那」という言葉の由来を詳しく考証している。実藤の考証によれば、日本人が「支那」を言い出したのは明治以後のことである。しかし、明治時代には「支那」という言葉には軽蔑の意が含まれておらず、中国人も悪感情を抱いていなかったようである。寧ろ、当時、一部の中国人は「大清帝国」を否定するためにわざと「支那」を使った。「日本人の口から「支那」をきいて、不快に感ずるようになったのは、二十一か条—シベリア出兵—パリ平和会議と日本の野心がつぎつぎにあらわれるにつれてのことであつて五四運動以後のこと」²⁾である。「五四運動のころから、留学生は、日本人の「支那」とよぶことは

2) 実藤けいしゅう、「国号問題」、『中国人日本留学史』、くろしお出版、p226、1970年10月増補版

反対しつづ（原文そのまま）け」た³⁾。その代表は研究会の同人と親交のある創造社のメンバーである郭沫若や郁達夫だ。中国国内の時勢の変化に伴い、1930年、中華民国国民政府は外交部に「支那」よばはり自今お断り⁴⁾の訓令を下した。即ち、日本政府からの公文書に「支那」という言葉を使用するものがあるなら、一切受け取らず、全て「中華民国」に改めてもらうということである。それ以後、日本政府の公用文は「支那」という言葉を全部「中華民国」に直した。ここで注目すべきなのは、政府間の公用文の場合に使われるのが、「中華民国」であり、「中国」ではないということである。「中国文学」の「中国」に関して、竹内好はこのように語っている。

僕は、自分のことを先づ云ふと、数年前、中国文学研究会を始めるときは、中国といふ言葉を会名に用ひて少しの疑惑も抱かなかつた。当時、滑稽な挿話がある。某漢学の老先生は書を寄せて中国を民国に改むべしと勧告された。中国を中華民国の略称とでも思はれたのであろうか。気の毒なベテンにかゝつた老先生の迂愚を年少客気の僕は手を拍つて大笑したこと勿論である。⁵⁾

この挿話は「中国」が「中華民国」の略称でないということを明確に説明している。中国文学研究会の若き同人で、後期の『中国文学』の編集を手伝った斎藤秋男の回想によれば、「中国」は「中国文学の団体と機関誌の固有名詞である。日常の会話ではシナでした」⁶⁾ということである。即ち、中国文学研究会や『中国文学』の「中国」は中国の現代文学を総称するときを使う既存の「支那」という概念の翻訳だと視してもいい。中国文学研究会にとって、この「中国」が固有名詞のような存在なので、研究会の公式の立場から支那文学は「中国文学」であるが、日常の世界は依然として「支那」の世界である。実際に『中国文学（月報）』に掲載されている中国文学研究会同人の文章を読めば、「中国」を使ったり「支那」を使ったり、相当混乱しているということがわかる。例えば、『中国文学（月報）』第一号に発表された文章の中では、竹内好の書いた時報「今日の中国文学の問題」において首尾始終「中国」が使われているのに対し、研究会の年配の同人で、魯迅の弟子として後に中国人に親しまれている増田渉は「雑言」では始終「支那」を使っていた。『中国文学（月報）』を読めば、増田は「支那」という言葉に愛着を持っているようで、「中国」という固有名詞をほとんど使わなかったことが分かる。さらに、興味深いのは岡崎俊夫が、第一号の時報「袁中郎研究の流行」の中では「中国」を使っているのに対し、第四号に発表した回想文「楽焼の郁達夫」では「支那語」、「支那の現代文学」のような言葉を連発していることである。中国文学研究会の「中国」に関する複雑な

3) 2) 参照, p226

4) 2) 参照, p226

5) 竹内好, 「支那と中国」, 『復刻中国文学』第六巻, p220

6) 斎藤秋男, 「中国文学研究会とわたし」, 小島晋治・大里浩秋・並木頼寿編, 『20世紀の中国研究』, 研文出版, p207, 2001年6月

思いは竹内好の「支那と中国」という文章を読めば分かる。あらゆる中国や支那を使う文句で最も注目すべきなのは『中国文学（月報）』第一号に掲載されている「中国文学研究会は中国文学の研究と日支両国文化の交驛を目的とする研究団体である」という研究会の主旨である。この表記はまさに川西正明が指摘したように、「この文章を読んでいて不思議に思うのは、「中国文学」と「支（那）」の文字が共存していること」⁷⁾だ。

川西の指摘は若き中国文学研究会にとって「中国」と「支那」は決してそれほど簡単に使い分けられる言葉でないということを物語っている。にもかかわらず、敢て既存の「支那」を棄て、「中国」を使った中国文学研究会の本当の狙いはどこにあるのであろうか。

僕らは中国といふ言葉の清新さを愛した。少年の行動の夢はつねに衣裳の生産に初まる。だが、それだけが全部の理由ではない。多少の支那文字を読み習ひ、多少の支那人と識つた僕らは、支那人がどんなに支那とよばれることを嫌ふか、逆に中国とよぶことが彼らをどれほど喜ばすかといふ、頗る単純な国民心理の洞察に基いてこれが応用を企てたわけである。⁸⁾

この回想は研究会が「中国」を会名として使う目的を明らかにしている。すなわち、「中国」という言葉は中国文学研究会が取った戦略である。中国人を喜ばせるのは一見して単純な理由のように見えるが、その時代の中国人にとって、「中国」か「支那」かが決して軽く看過できる問題でないことを再び物語った。それが故に、「中国」を使った「僕らの会はまづ支那に存在を知られた。僕らの雑誌が日本の雑誌目録にさえ載せられぬ中に支那で翻訳され紹介された」⁹⁾。更に、推測すれば、もし「中国文学」という誌名でないなら、あの郭沫若は題箋を書くのを断ったかも知れぬ。無論、「中国」を会名とするのは単なる中国人を喜ばせるための幼稚な行動ではない。その最終的な狙いは研究会の以後の発展のためである。しかも、既存のアカデミックの世界に対抗する目的で立ち上がった会にとって、更に重要なのは、「漢学や支那学の伝統を打ち倒すために、中国文学といふ名称は是非ともこれを必要したのであ」¹⁰⁾る。

というように、「中国」という翻訳語は中国文学研究会の意図的かつ戦略的な選択である。この選択は「何のための訳」に対する中国文学研究会の答えである。「何のための訳」は翻訳の一手手前の問題である。だいたい、翻訳を論じるとき、「何を訳すか」と「如何に訳すか」という二つの問題を中心とし、「何のための訳」をそれほど重要視しない傾向があるが、中国文学研究会にとって「何のための訳」は一大事である。ただし、これは中国文学研究会が踏み出した第一歩である。この「中国」という翻訳語に相応するために、中国文学研究会は「何を

7) 川西政明、『わが幻の国』、講談社、p84、1996年

8) 5) 参照、p220

9) 5) 参照、p220

10) 5) 参照、p221

訳すか」と「如何に訳すか」という二つの問題に答えなければならない。発足後の中国文学研究会はまず翻訳実践、その次に、翻訳をめぐる議論を通じ、会の存在を証明しようとした。

3

中国文学研究会は設立の日から、翻訳実践を一大事としていた。1934年3月1日日付の竹内好の日記には中国文学研究会の準備会議に関する記録がある。

中国文学研究会の第一回準備総会を開く。会名は中国文学研究会に決定、披露まで当分の間準備行動とす。各自過去の研究コースの紹介と将来の希望を述ぶ。例会、毎月一日、十五日に決定。回覧雑誌を出し、各自翻訳一篇ずつ今月中に書くことを決める。

というように、成立早々、中国文学研究会は翻訳に着手した。ところが、中国文学研究会はサポートがない、会員の納める会費に頼り運営している小さな同人組織なので、常に財政上の困窮に直面せざるを得ない。にもかかわらず、中国文学研究会は翻訳の初志を貫こうとした。

三種郵便の認可が下りて送料の負担がやゝ減じたわけである。(三部まで五厘)現在のまゝでも会員五百人なければ収支償はない。当分は同人の拠金で仕方ないとしても、頁数を増して翻訳を載せることが宿志であり、また唯一の道である。¹¹⁾

その実践として、『中国文学(月報)』第六号と第七号に二号連続で「現代小品文特輯」を掲載した。この特輯の訳者増田渉、松枝茂夫、実藤恵秀、武田泰淳、竹内好、岡崎俊夫ら6人はいずれも中国文学研究会の同人である。翻訳特輯は中国側の注目を浴びた。雑誌第九号の会員消息欄には松枝茂夫宛の楊雲萍からの手紙が載せられている。

「中国文学」の翻訳号は二号共に感心した、わが中文会員のケイベツすべからざる所以を知つた。第一人選がいい、選家は做不得的、実は僕は、諸兄がどんな人を選ぶかと、ケンソンないたづら気分で見居たんだよ。感佩いたした、諸兄によるしく。早く季刊が出るやうにしたいナ。

楊氏は台湾生まれの作家で、1925年に台湾の最初の白話文雑誌を出版した人物である。1926

11) 「後記」、『復刻中国文学』第二巻, p103

年に日本大学の予科に留学し、1932年に台湾に戻った。「人選がいい」一言はすなわち、「何を翻訳するか」に対する答えである。楊の言及する人選が「現代小品文特輯」に選ばれている作家を指している。具体的に見れば、翻訳されている作家には魯迅、林語堂、周作人、老舍、郁達夫、劉半農らの名が挙げられている。これらの作家はいずれも、中国白話文学の提唱者であり、しかも実践者でもある。彼らの作品は当時の中国文学の方向とレベルを代表していると言っても過言ではない。だから、白話文の実践者である楊氏は中国文学研究会の努力を高く評価した。このような地道な努力を重ねたこそ、中国文学研究会と『中国文学』は早くから中国側の注目を集めた。

1935年3月から出版し始めた『中国文学』が1946年3月1日自主廃刊まで連続で九十二号を出版された。日本敗戦後、当時、日本国内にいる若き同人を中心に一時『中国文学』を復刊し、1948年5月まで連続で十三号を出版した。1948年5月、中国から復員して日本に帰国した竹内好の強い反対で『中国文学』は永遠に休刊した。戦前と戦後と合わせて、『中国文学』は百五号を出版した。百五号の雑誌に掲載されている翻訳は84点にも達している。本稿では戦前の中国文学研究会の活動を対象にしているので、考察の焦点を戦前の『中国文学』に絞る。戦前の『中国文学』に掲載されている翻訳物は60点ぐらいあるが、その内の40点ぐらいは中国現代文学作家の作品である。それ以外に、会の同人が訳者或いは参加者として翻訳した作品集や単行本も目立っている。

21ページの翻訳リストは筆者が参考資料に基づき、作成したもので、不十分かも知れぬが、それにしても、会の努力が一目瞭然である。このリストを分析すれば、中国文学研究会の翻訳はほぼ五・四運動以後の白話文学に集中していることが分かる。こうした翻訳の傾向は既存の漢学や支那学との間に大差がある。中国文学研究会の活発な中国現代文学の翻訳が出る前に、日本の中国学界には個人の好みから中国現代文学の翻訳を試みた青木正見や吉川幸次郎を除き、ほとんどの研究者は、中国現代文学に関心を持たなかった。既存の学界にとって中国現代文学は西洋文学の模倣に過ぎず、幼稚きわまりで、研究に値しないものである。魯迅を代表とする中国現代文学の作家たちが漢学や支那学の研究視野にさえ入らない存在である。ところが、中国文学研究会は中国現代文学の翻訳に力を入れた。これは会が選んだ道であり、既存の漢学や支那学から会を選び取る手段でもある。

会の同人は様々な作家の作品を翻訳し、『中国文学』も様々な作品の訳を掲載した。そうした仕事は決して訳者や編集者の個人の好き嫌いに左右されなかった。どんなにいやでも、どんなにつらくても翻訳という仕事を続ける。『中国文学』第七十四号に「悔恨」というタイトルのエッセイが載せられている。

作品名	著者	訳者	発行年	出版社
『支那小説史』	魯迅	増田渉	1935年	サイレン社
『魯迅選集』		佐藤春夫 増田渉	1935年	岩波文庫
『世界短編傑作全集第六巻』 ¹²⁾		佐藤春夫	1936年	河出書房
『大魯迅全集』		増田渉 小田嶽夫 松枝茂夫など	1937年	改造社
『中国の西北角』	長江	松枝茂夫	1938年	改造社
『北伐』	郭沫若	松枝茂夫	1938年	改造社
『大陸文学叢書』 ¹³⁾		小田嶽夫 松枝茂夫など	1938年	改造社
『断鴻零雁記』	蘇曼殊	飯塚朗	1938年	改造文庫
『同行者』	蕭軍その他	小田嶽夫	1938年	竹内書店
『周作人随筆集』		松枝茂夫	1938年	改造社
『現代支那文学叢刊』 ¹⁴⁾		中国文学研究会	1939年	伊藤書店
『繁星』	謝冰心	飯塚朗	1939年	伊藤書店
『中国文学之源流』	周作人	松枝茂夫	1939年	文求堂
『現代支那文学全集』 ¹⁵⁾		奥野信太郎など	1940年	東成社
『瓜豆集』	周作人	松枝茂夫	1940年	富山房
『北京好日』	林語堂	小田嶽夫	1940年	創元社
『湖南の兵士』	沈從文	大島覚(武田)	1942年	小学館
『小学教師倪煥之』	葉聖陶	竹内好	1943年	大阪屋号書店

12) 「世界短編傑作全集」第六巻「支那印度短編集」(佐藤春夫編)のうちの「支那短篇集」の担当者:増田渉:「幸運児」(凌濛初)、「眉間尺」(魯迅)、「潘先生の遭難」(葉紹鈞)、「薪」(呉組細);松枝茂夫:「浮生六記」(沈復);武田泰淳:「函谷関」(郭沫若)、「前哨兵」(魏金枝)

13) 『大陸文学叢書2』小田嶽夫訳、蕭軍作「第三代」;『大陸文学叢書7』松枝茂夫訳、沈從文「辺城」

14) 第一輯『春桃』,第二輯『春蠶』

15) 『現代支那文学全集』は当初十二巻を予定したが、結局出版されたのは八巻だけであった。この八巻は以下のようなものである。

第一巻郭沫若「創造十年」(猪俣庄一);第二巻郁達夫「沈倫」(岡崎俊夫);第三巻茅盾「虹」(武田泰淳);第四巻蕭軍「愛すればこそ」(小田嶽夫・武田泰淳);第六巻巴金「新生」(飯村聯東);第九巻「女流作家集」(奥野信太郎・武田泰淳);第十巻「随筆集」(松枝茂夫・岡崎俊夫・小野忍・飯塚朗・奥野信太郎);第十二巻「文芸評論集」(松枝茂夫・吉村永吉)

大体翻訳といふ仕事は侘しいものである。原作がうまければうまいで癢にさはるし、まづければまづいで不快になる。それでもうまくて癢にさはる方はまだいゝ。それと取組むことによつて他人のものではあるが文学の醍醐味に浸れるし、紹介して日本の文学の根を培ふ肥しとなると思へば張りもあらう、慰めにもならう。が、支那文学の現代文学はまづくて不快になる方が多い。訳せば訳すほど文学から遠ざかつて行く自分を感じる。

文章の作者は岡崎俊夫である。上の文字を見れば、中国現代文学に対し、岡崎は明らかに否定的だということが分かる。岡崎のこうした「悔恨」に松枝茂夫はその次月号ですばやく反論した¹⁶⁾。無論、松枝は中国の現代文学を高く評価しているわけではない。全体から見れば、魯迅、周作人ら極少数の作家の作品を除き、中国文学研究会は中国の現代文学の価値をそれほど認めていない。それにしても、会は翻訳し、紹介した。その理由は以下のようなものである。

つまらないなりに意味がやはりあると思つたから。その意味はいろいろの意味だが、一番大切な点は、僕らが新しい文学運動を冷眼視してゐるのではないといふこと、すき好んで小品文の紹介ばかりしてゐるのではないこと、文学の本義は作品にあることは疑ひなく、魯迅にしろ周作人にしろ、自分の雑文が文学だなど思つてやしない。現代中国文学唯一の成功は小品文の成功であるといふことは、一種の文学観であり、俗文学に対する嫌悪の表白（流行の言葉で云へば浪漫精神）である。¹⁷⁾

すなわち、中国文学研究会にとって、翻訳は一種の態度表明だと視してもいい。翻訳を通じ、偏見を持たず、客観的に中国の現代文学を紹介する。そうした実践により中国文学研究会は自ら既存の中国学界と一線を引く。それよりさらに重要なのは、中国文学研究会は中国の現代文学の翻訳や研究を通じ、自分自身の「文学」を求めようとしたことである。前掲した岡崎の「悔恨」からもわかるように、彼らは西洋伝来の「文学」という概念で中国現代文学を捉えている際、時には、中国現代文学の水準の低さに悩む。それにしても、中国現代文学の発展を見守り、その「さもし根性からしか読まなかつた」¹⁸⁾という姿は中国文学研究会の地道な努力そのものの現れである。研究会のそうした努力があつたからこそ、戦後日本の中国現代文学研究の基礎を築いたと言っても過言ではない。

16) 原文はこうなっている：支那の現代文学はつまらないと岡崎俊夫が「悔恨」してゐるのも、何だか今更のやうに聞えてをかしい位だ。しかし支那に新文学興つて実はまだ三十年にもならないのであつてみれば、名篇大作の出現を今俄かに期待するのはする方が無理だらう。ホンヤク商売があがつたりだからといつて、急に矛を逆しまにして支那の現代文学に毒つくのもいかゞであらうか。

17) 「後記」、『復刻中国文学』第六巻、p333

18) 松枝茂夫、「好きな作家・好きでない作家—現代文学雑感」、『復刻中国文学』第七巻、p300

4

日本の中国侵略戦争の拡大に従い、中国文学研究会の活動も大きな影響を受けた。1937年7月の「蘆溝橋事変」が勃発した後、武田泰淳ら四人の同人は応召し、中国の戦場に向かった。その他、竹内好、増田渉、実藤けいしゅうも日本外務省の関係で北京に渡った。それより少し遅れて、飯塚朗も印税で北京に旅立った。日本国内に残っていた同人は松枝茂夫、小野忍、神谷正男らの数人しかいなかった。北京へ行った竹内好の代わりに『中国文学（月報）』の編集を担当した松枝茂夫も1939年3月九州大学に就職するため、東京を離れた。それ以後、東京に残っていた同人はかわるがわる雑誌の編集を担当した。それでも、『中国文学（月報）』は中断せず出版し続けた。だが、雑誌の出版はめまぐるしく変わる日本国内の情勢に影響されるのは必至のことである。言論規制が厳しくなるに従い、無報酬で執筆するのを原則としている『中国文学（月報）』は窮地に追い込まれた。原稿の集まりが悪く、編集者がほとんど兼務という形でやっていたので、雑誌は質的に低下するの不思議ではない。1939年末、二年間の中国留学¹⁹⁾を終え、日本に戻った竹内好は中国文学研究会の現状に不満を感じ、研究会の改組に着手した²⁰⁾。その改組の一環として、1940年4月の第六十号以後、『中国文学（月報）』から『中国文学』に改名し、発行元も生活社に移し、機関誌から市販雑誌に変えた。生活社は戦時中活躍した出版社の一つである。市販雑誌に変身した『中国文学』は前の『中国文学（月報）』と比べ、内容上の変化が目瞭然である。まず、12頁立てから48頁立てに変わった。それから、出版元である生活社の広告が目立つようになった。その広告をみれば、生活社は中国関係の翻訳物を数多く出したことが分かる。これは当時日本国内の中国関係の書籍の翻訳ブームに関わっている。そうした翻訳ブームは「私たちは時世のこのやうに転移することを考へ及ばなかつたし、時世も私たちに期待したものに失望してゐるかもしれない。この冊子をはじめた頃から思ふと、昨今の翻訳の流行など夢のやうである。それがみな私たちより遥かに巨きな力のした仕事である」²¹⁾というほどの盛況であった。統計によれば、1940年1月から8月まで中国関係の翻訳物は49冊に達し、月に6冊ずつ出版されたという結果になった²²⁾。こうした背景で、改組を機に、中国文学研究会は「支那文学の代表的古典及び現代文学の翻訳」²³⁾を目標として明確に提示した。その結果、「翻訳は面白いがそれで紙面を埋めることは感心しない」²⁴⁾という会員からの批評を招いたほど、『中国文学』に掲載されている翻訳関係のものが改版前よりかなり増えた。だが、中国文学研究会にとって、翻訳自体は唯一の目的ではない。この時期の中国文学研究会にとって翻訳の氾濫及びそれに伴う誤訳の横行と対峙することも重要な仕事であった。そのために、『中国文学』は第六十六号から「翻訳時評」という欄を設けた。

19) 1937年10月、竹内好は日本外務省文化事業部の第三種補助金を利用して語学研修という名目で中国に渡った。

20) この改組は必ずしも他の同人の賛成を得たわけではない。ところが、中国文学研究会の運営は事実上竹内好によるところが大きいため、他の同人も反対するわけにもいかなかった。

21) 17) 参照, p45

22) 神谷正男, 「翻訳時評」, 『復刻中国文学』第六巻, p374による

23) 竹内好, 「中国文学研究会について」, 『復刻中国文学』第六巻, p44

24) 17) 参照, p381

「翻訳時評」欄を設立する理由といえ、翻訳といふことは、ずみ分いろいろの問題を含んであるくせに、あまり問題にされない。西洋文学の方は短いなりに伝統があるからいゝが、支那文学ではまだ基準になるだけの翻訳の型すら生まれてゐない。翻訳の問題は、語学や表現の問題だけでなく、考へていくと結局人間の問題まで還元してしまふ。技術だけの範囲でもかなり複雑である。この欄は二三回づゝ各方面の人に書いてもらふつもりである。そこから問題が整理して抽出されれば、改めて別に掲げてもいゝのである。」²⁵⁾とのことである。

「後記」の執筆者は竹内好である。「技術だけの範囲でもかなり複雑である」と認めながら、竹内にとってさらに重要なのは「翻訳の問題は、語学や表現の問題だけでなく、考へていくと結局人間の問題まで還元してしまふ」ということである。こうした翻訳に関する考へを持ってゐるからこそ、竹内好は後日の「翻訳時評」で意識的に言語という枠組みを超えた翻訳文化論を展開した。そうした翻訳論はまた彼と支那学者吉川幸次郎との間の論争を招いた。

第六十六号から始まる「翻訳時評」欄は第七十九号まで、十二回連続した。執筆者は神谷正男、竹内好、魚返善雄と吉川幸次郎という順で、それぞれ三号ずつ担当する形になっている。四人の執筆者は一口でいえば中国研究者であるが、詳しく調べれば、経歴が全く異なるということがわかる。神谷正男は北京に三年間留学したことがある。北京滞在時代からすでに『中国文学』に投稿し、日本に帰国してから中国文学研究会に加入した。専門は中国の思想史であるが、竹内好や武田泰淳らが中国に渡り、松枝茂夫も就職の関係で東京を離れる間、神谷は『中国文学（月報）』の編集に携わった。魚返善雄は上海東亜同文書院を中退し、日本に帰国してから、文部省の教師検定試験に合格し、東亜学校で教える傍ら、1939年から東大文学部の非常勤講師として27年間も勤めた万年講師と呼ばれる人物である。竹内好は無論中国文学研究会の代表的存在である。吉川幸次郎は中国文学研究会の反対する学界を代表する支那学者である。吉川氏の専門は中国古典であるが、胡適や豊子愷ら現代文学者の作品も翻訳した。この四人が『中国文学』で翻訳を議論すること自体は意味深いことであり、翻訳をめぐる激突も想像に難くない。四人の内、神谷と魚返は温和な筆致で、当時、出版された翻訳ものを具体的に検証しながら、翻訳の基本問題言い換えれば、「何を訳すか」と「如何に訳すか」について、それぞれ自分の意見を述べた。ところが、竹内好と吉川幸次郎との間に「翻訳時評」で提出された問題をめぐり、激しく意見を交わした。

論争の発端は竹内好の執筆した翻訳時評である。神谷正男の次に「翻訳時評」を執筆した竹内好は最初から具体論を避け、翻訳批評の問題を提示し、翻訳の基準と翻訳の体系の建設が大事だということを力説した。その上に、竹内好は自分なりの翻訳論を展開した。竹内好にとって、「翻訳とは、原文解釈の究極で」²⁶⁾あり、「いゝ翻訳とは、最もよく解釈された、従つて解

25) 竹内好, 「翻訳時評」, 『復刻中国文学』第六卷, p648

26) 25) 参照, p645

訳の限界を自覚した態度から生まれるものと信じている」²⁷⁾。こうした基準に基づき、竹内好は当時の日本の中国文学翻訳者を直訳派と意識派に分け、中国文学研究会の同人である増田渉と松枝茂夫を直訳派に分類し、吉川幸次郎と魚返善雄を意識派に帰した。竹内好は、語学の視点から吉川と魚返の翻訳を認めながら、「言葉に対する感覚の鋭さの足りない」ことを指摘した。その上に、彼は、吉川幸次郎訳の「四十自述」を取り上げ、「学者としての吉川氏は僕の尊敬するところだが、文学者として、従つて文学作品の翻訳者としては僕は絶対に承服出来ない。」²⁸⁾と、批判した。

竹内好の本意は寧ろ吉川と魚返両氏の訳を評価しようとしたが、意外なことに、彼のそうした分類は二人の当事者の反論を招いた。魚返は「レットル未調製」と「レットルは当分不要」だけで返事したが、吉川は竹内との間に幾通の書簡を往復した。その後、それらの往復書簡は「翻訳論の問題」というタイトルで『中国文学』第七十一号に発表された。二人の論争の焦点は三つある。一つ目は吉川氏が直訳派か意識派か。二つ目は胡適の「四十自叙」は低俗かどうかの問題。三つ目は誤訳可避か不可避か。この三つの問題をめぐり、両氏は一々自分自身の考えを陳述した。特に、吉川幸次郎はいかにも支那学者らしく具体的な例を挙げ、一々説明して、自分が直訳派であり、「日本語としての調和よりも、むしろ支那語をそのままに日本語を捜すのに苦勞している」²⁹⁾という原文至上主義だと主張した。その次に、胡適の「四十自叙」を訳した理由として幾分人間の真実を感じたからだと説明した。最後に、吉川氏は自分が誤訳可避の立場に立つと明言した。吉川の手紙に対し、竹内好は明らかに戸惑いを感じた。好は最初から具体的な技術論を展開するつもりが毛頭なかったようである。だから、最初の返事で、あっさり自分の分類の勝手さを認めた。ただし、吉川の翻訳態度を強く質疑した。理由が二つある。「そんなに手軽に、文章といふものが、書けるものかどうか、といふことが第一である。第二に、支那語を支那語として、支那人のやうに理解することが出来るどうか」³⁰⁾ということである。だが、その後、吉川氏の実証的な翻訳論に対し、竹内も具体的な技術論を展開せざるを得なかった。ところが、こうした議論の展開は竹内にとって不本意なので、彼は再び自分の理論に戻り、自分と吉川の区別を「僕にとって、支那文学を在らしめるものは、僕自身であるし、吉川氏にとっては、支那文学に無限に近づくことが学問の態度なのである。それが翻訳論に現れて誤訳不可避と可避になるのではないか。」³¹⁾と結論付けた。これによって、二人の翻訳に関する議論を終えた。

上述の二人の議論は明らかに翻訳範囲内に止まっているわけではない。翻訳が単なる語学力の問題ではないということが二人の共通的な意見である。語学の問題というより、訳者の翻訳態度と翻訳方法は更なる重要な問題だという点においても二人の意見は一致しているが、具体

27) 25) 参照, p646

28) 25) 参照, p648

29) 吉川幸次郎・竹内好, 「翻訳論の問題」, 『復刻中国文学』第七巻, p86

30) 29) 参照, p87

31) 29) 参照, p92

的な問題になると、二人の考え方はかなり異なっている。竹内好は翻訳を通じ、訳者更に広く言えば外国文学者の主体性を問うのに対し、吉川幸次郎は始終技術の次元で翻訳を論じている。氏にとって翻訳は外国文学者の正式な研究に入る前の準備に過ぎぬ。だから、翻訳が単なる語学力の問題ではないということを認めるにしても、語学の立場から翻訳を検証するのが大事だという考えである。これは竹内から見れば傍観者の立場である。表から見れば、吉川氏は始終細かい技術論を展開しているように見えるが、その裏には実に、実証主義の態度で翻訳に臨む学者吉川幸次郎が立っている。翻訳に関する両氏の対立はある意味では中国文学研究会と既存の漢学・支那学界との対立でもあると考えられる。

なぜかといえば、実際に、この翻訳論を終えた後、吉川幸次郎は引き続き自分の担当する「翻訳時評」で中国文学研究会の翻訳態度を批判した。まず、竹内好の翻訳体系を築くべきだという考えに対し、吉川は「体系への性急な焦慮は、遂に大ざっぱな読書の横行となつたからである。これは始めに述べたやうに、矛盾である。読書による実証なくして、いかにして正しい体系をうち立て得るか。かうした傾向は、この学問の科学としての存在を危くするものであり、当初にこの学問の志したところと、背馳するものといはねばならぬ。」³²⁾と批判した。実証の態度と学問の科学性を強調するのはいかにも支那学者らしい発言である。

その実証の態度を証明するためようだが、吉川は自分の担当する「翻訳時評」(三)で中国文学研究会の同人である岡崎俊夫の「黒猫」(筆者註：郭沫若著)という翻訳を具体的に検証し、岡崎の誤訳を一々指摘した後、吉川は「旧来の支那学に雄々しくも反旗をひるがへし、民国文学といふ新しい分野を開拓しようとして立ち上がった戦士たち、その人たちも、事項尊重主義、いひかへれば粗枝大葉主義である点に於ては、旧来の支那学の態度と、何ら撰ぶところが無い。」³³⁾と中国文学研究会を辛辣に批判した。

だが、こうした批判は翻訳をめぐる個人的な批判ではない。両者の意見の相違は実は既存のアカデミックの世界に対抗するために発足した中国文学研究会と漢学・支那学の異なりそのものを如実に語っている。

5

本稿で筆者は中国文学研究会の翻訳活動と『中国文学』の「翻訳時評」に焦点を絞り、日本の中国文学研究者の翻訳に関する考え方を考察し、特に竹内好と吉川幸次郎両氏の翻訳論を具体的に検証した。この考察から分かるように、翻訳は実に翻訳だけの問題ではない。広くいえば、これは外国文学者の外国文学研究の態度に関係していると思う。吉川幸次郎が代表する支

32) 吉川幸次郎、「翻訳時評」二、『復刻中国文学』第七巻，p412

33) 吉川幸次郎、「翻訳時評」三、『復刻中国文学』第七巻，p462

那学者は無限に研究対象に近づくことを究極的な目標として追求している。だから、吉川氏は極自然に中国のことを「わが国」という³⁴⁾。だが、中国文学研究会は異なる。中国の現代文学は彼らにとって文学そのものであり、その以上でもないし、その以下でもない。翻訳しても、研究しても、大事なものは主体的に対象を捉えることであり、傍観者の立場をとらないという態度である。中国文学研究会にとって翻訳は中国の現代文学の発展のためでなく、自分自身の文学のためである。翻訳は会にとって始終文学そのものである。

ところが、中国文学研究会にとっても、吉川幸次郎にとっても、翻訳は簡単に解決できる問題ではない。本稿では主として、会のリーダーである竹内好に焦点を当てたが、実は松枝茂夫ら他の会の同人は翻訳に関して積極的に発言しているし、中国現代文学を積極的に翻訳するが、ほとんど、翻訳に関して発言しない武田泰淳の行動も意味深い。更に、中国文学研究会の内、最も翻訳に力を入れ、業績を上げた松枝茂夫は日本書物の漢訳ということにも注目した。これらの問題はいずれも深く分析する必要がある。それに吉川氏は後にまたドイツ文学者大山定一と翻訳に関し、意見を交わし、『洛中書簡』も出した。上述の問題はいずれも日本の中国研究に関係しているので、これから引き続き考えて行きたいと思う。

註

※ 本稿の中国文学研究会のテキストとして、『復刻中国文学』(1-8巻, 汲古書店, 1972年)を使用している。

Summary

Chinese Literature Association is the first group for the study of modern Chinese Literature in Japan. And moreover, is the first group used “China” as the name of the group and journal. Since the founding of the association, the members actively engaged on the translation works of modern Chinese Literature. At the same time, in the journal “Chinese Literature” open “Translation Commentary” column discussed the problem of translation. This paper will focus the translation activities of Chinese Literature Association and the “Chinese Literature” journal, both in analysis the name of the journal is also the name of association “Chinese Literature” related to translation and the “Translation Commentary” column. Based on the content, consider the relationship between “Foreign literature studies and Translation”.

34) 丸山真男・加藤周一, 『翻訳と日本の近代』, 岩波新書, p76, 2009年1月第10刷